

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第67号(2012.08.31)
事務局川西地区自主防災会

第2回 評価委員会開催

香川県内自主防災組織への底上げを、図る、フォローアップ事業の、中間報告に対する「評価委員会」が、8月24日（金）e-とぴあ・かがわにおいて、開催された。計画では50組織以上にわたっての、フォローアップ活動、現在までに33組織について、訪問診断活動が行われた。



○活発な取組みが期待される 4組織

○フォローアップを継続すれば、前向きに活動が行われる . . . 25組織

延べ29組織 約88%については、地域防災力の向上が、期待できるという結果が出ました。

来年2月までの後期活動については、前期での経験を生かし、積極的にきめ細かな取組みを行うことを、決意して評価委員会を終了、その後、場所をかえて交流会に臨んだ。



まげねど！ 女川・石巻

善通寺市に司令部を置く第14旅団は、東日本大震災において宮城県女川町及び石巻市北東部において災害派遣活動を行いました。旅団の活動内容を紹介し、自衛隊の理解の一助になれば幸いです。

最初に、『まげねど！女川・石巻』というのは、当時、派遣された部隊毎に地元を激励する言葉のステッカーを作成し、ヘルメットに貼付して活動していました。第14旅団は女川町に到着した際、当時の総務課長が現地対策本部と調整して「まげねど」（負けないぞ!）という女川町の言葉を使用することとし、派遣間旅団の全隊員がヘルメットに貼付して活動しました。

1 行動概要

平成23年3月11日に東北地方太平洋沖を震源とする地震が発生し、地震及び津波により広範囲な地域で被害が発生しました。

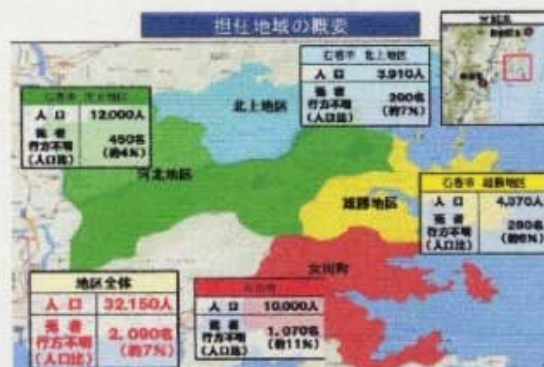
地震の発生により、太平洋沿岸部に大津波警報が発令され、四国地区も一部が大津波警報の発令区域に入っていました。3月14日にその警報も解除され、幸いにも四国地区に大きな被害はありませんでした。第14旅団としては、その夕刻に上級部隊から東北地方へ派遣を命ぜられ、翌15日には旅団主力で東北地方（宮城県）を目標に移動を開始しました。

前進にあたり、幕僚長を長とする先行班を、北徳島分屯地からヘリコプターにより空路仙台駐屯地を目標として出発しましたが、東京以北の天候が悪く、立川駐屯地から車両により仙台に入りました。

主力は各駐屯地から前進し、「富士駐屯地」及び「宇都宮駐屯地」を経て、3月18日に宮城県女川町及び石巻市のそれぞれの活動拠点に到着し、旅団司令部を女川町総合運動公園内に開設し、救援活動を開始しました。

第14旅団が担当した地域は、女川町と石巻市北東部（北上地区、河北地区、雄勝地区）で、被災地の様相は大きく2つに区別されました。

1つは津波の影響で市街地が壊滅的な被害を受けた沿岸部地域、2つ目は北上川流域で、津波が引いた後も水が引かず、水没してしまった地域です。このような中で、「まげねど女川・石巻」を合言葉に、そして「全ての活動は被災者のために」を活動方針に掲げ、行方不明者の捜索生活支援（炊き出し支援、入浴・



給水支援、医療支援等)、輸送支援、道路の啓開・瓦礫の除去などを、約70日間にわたって行いました。

2 行方不明者の搜索

旅団の活動地域全般では、大きく4次に区分して警察・消防等と連携を図りつつ、搜索活動を行いました。

第1次搜索は、活動地域を、声を掛けつつ迅速に搜索するものです。

第2次搜索は、人力で動かせる瓦礫等はこれを除去しつつ搜索しました。

第3次搜索は、機械力(油圧ショベルやバケットローダー等)をもって瓦礫を除去しつつ搜索しました。

第4次搜索は、地元自治体及び地域から強い搜索要望があった所を再度搜索するものです。

概要で記載したとおり、北上川流域の水没地域では、当初ボートによる搜索活動を行いました。国土交通省が設置した大型ポンプにより排水が進み、水位が下がって人が入ることができる状態になると、部隊を投入して搜索しました。

3 生活支援活動

3月19日から、本格的な支援活動を開始しました。

(1) 給食・給水支援

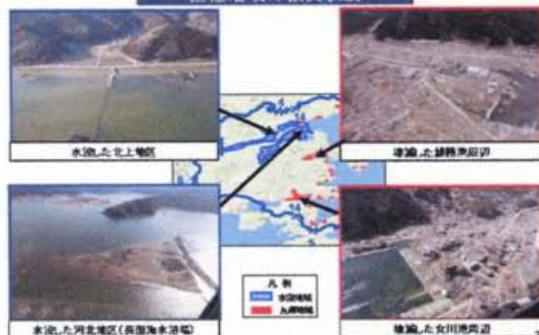
自衛隊では、隊員の給食のための炊事トレーラや水タンクトレーラを保有しています。これは、野外で材料や水の供給を行いつつ部隊行動を行うための装備ですが、これらを使用して被災者の方々へ給食・給水支援を行いました。

調理も、通常は示されたレシピに従い材料を切り調理を行うのですが、当時の給食支援隊長は「被災者により美味しいものを提供したい。」との思いから、地元の給食センター等に足を運び、被災者の方から情報を収集して地元の味付けに近づくように支援を行いました。

(2) 被災者へのテント提供

女川町の避難所には、当時、約2000名を越える被災者の方が避難していました

担任地域の被災状況



第1・2次搜索



第3次搜索(重機による行方不明者搜索)



生活支援活動(3/19, 20から開始)



が、一部の方は避難所に入らず駐車場で車両の中で過ごしている方がいました。

また、小さい子供さんがいる家族の方などは、「子供の泣き声が回りに迷惑をかける。」との配慮から車両で避難している方もいらっしゃいました。

この時期は燃料が無く、ガソリンスタンドでは給油のために長蛇の車の列が出来ていました。そのような状況で、夜間なども寒い車の中でエンジンを切って避難していました。部隊としても携行した天幕（テント）を全て使用していなかったことから、現地対策本部と調整して、普段訓練では宿営用として使用していた「6人用天幕」33張りとおストーブを提供したのが「被災者用テント村」です。

(3) 入浴支援

入浴支援は、3月22日から開始しました。装備品で保有する入浴セットを女川総合運動公園内に展開しました。

我々が活動した地域は漁業が盛んなところであり、魚槽というものがありました。これは、水揚げした魚を入れるものですが、これにお湯を張り浴槽として使用しました。

お湯を沸かすボイラーが不足したため、化学物質や放射性物質を除染する器材を使用してお湯を沸かし、前述の魚槽に給湯しました。

また、除染器材は車両に搭載していることから先端部にシャワーを装着し、移動式のシャワー支援も行いました。また、北上地区に「追分温泉」という施設がありますが、停電等でその機能が停止しており、イラクで使用した発電機やボイラー用の重油を提供し、温泉の機能回復を図りました。

(4) 洗濯支援

浴場を出たところに洗濯所を開設しました。水道は断水していましたが川や沢には水が流れていて、被災者の方々はこれらの沢水等を使用して洗濯を行っていました。

しかしながら、3月の東北地方は雪が舞うような天候であり、洗濯できるとはいえ非常に冷たいものでした。「この環境を少しでも向上させることが出来ないか。」と、まず、炊事で使用する釜でお湯を沸かし、これを洗濯される方々の「タライ」などに提供したのが洗濯支援の始まりでした。

そのうちに、国土交通省から救援物資として全自動洗濯機が届けられ、写真のようにテントの中に洗濯機を設置して使用を開始しましたが、依然断水は続いており洗濯機への給水はバケツによらなければなりませんでした。洗濯機へはバケツで水を汲み、すすぎ用のタライにお湯を提供するという作業が続きました。

コート周辺の観覧席にロープを張り、簡易の物干し場も作成しました。「女性用乾燥室も必要では？」と、天幕を女性用専用の乾燥室として提供しました。

増大する入浴所要への総合的な取組み



弘法の湯(野外入浴セット)



魚槽による急造簡易風呂



温水シャワーの設置(化学防護隊)



北上地区「追分温泉」の復興支援

簡易洗濯所の利用状況



岩場に設置した洗濯場(米・沼田)



1t水トレーより給水(平均15t/日)



通日の盛況



女性用乾燥室

(5) 医療支援

自衛隊に医者資格を有する「医官」と、看護師資格を有する「看護官」が勤務しています。

今回の災害派遣では、これら衛生要員により自衛隊が開設した救護所での医療支援と、各地域を巡回して診療する巡回診療を併用して医療支援を行いました。

(6) 道路の啓開及び瓦礫の除去

旅団の活動地域は、津波の影響でいたる所に瓦礫があり、行方不明者の捜索や物資の輸送等に制約を与えるものでした。

自衛隊が保有する建設器材やダンプトラックなどの車両によりその瓦礫を除去・運搬し、道路などを使用できるようにしました。

活動中に地元の子供たちからいただいた激励メッセージを見てみると、「瓦礫を片付けてくれてありがとう。」という内容が非常に多かったことを考えると、子供たちの心にあった「瓦礫」という大きな障害を取り除くことが出来たのではと思っています。

(7) 輸送支援

輸送支援では、救援物資の輸送や人員輸送を行いました。

中でも、避難所に避難している方は、避難所で救援物資を受け取ることが出来ますが、自宅で避難している方もいたことから、これらの方々へ救援物資を届けることも重要な任務の一つでした。

まず、地域の各家をグループ化し、自宅に避難しているの方々から必要とする救援物資の種類・数量を把握して、これを届けるという流れになります。旅団が展開した地域は、昔のような地域の繋がりが強いところであったことから、自治会等を通じて避難している方のニーズを把握し、各家庭への物資の配分では、自治会長のような地域で中心的役割を担っている方のところまで輸送し、その後は地元の方及びボランティアなど方々の支援を得て行いました。

4 最後に

第14旅団の宮城県における災害派遣活動を紹介しましたが、都会部では薄れかけている「自治会（地域の繋がり）」というシステムは、災害対応では大きな役割を果たします。「かがわ自主ぼう連絡協議会」における今後の活動の一助になれば幸いです。

診療支援(巡回診療)の状況



瓦礫除去の状況



在宅避難者 支援物資ネットワーク



事務局だより

平成24年 8月

かがわ自主ぼうの最近の活動を紹介します。

5ヶ年計画「分散型 防災資材庫、整備事業」終了！

川西地区自主防災会では今月（8月）2個の防災資材庫を設置。

これによって、平成20年度から5ヶ年計画で整備してきた「分散型 防災資材庫、整備事業」は終了しました。

設備にあたっての資金は、すべて地域住民による、まちづくり基金によるものです。この5年間整備にあたって、設置場所の選定から地権者への依頼、関係者への根回し等、多くの課題を乗り越えて達成したものです。地域の底力を感じた気がします。参考までに所要経費について、整理してみました。

平成20年度	351,916円	2個設置
平成21年度	549,473円	3個設置
平成22年度	400,577円	2個設置
平成23年度	289,390円	2個設置
平成24年度	366,060円	2個設置
合計	1,957,416円	11個



編集後記

今月の防災減災の輪は、陸上自衛隊第14旅団司令部より「第14旅団東日本大震災災害派遣活動について」の原稿をお寄せいただきました。誠にありがとうございました。